

## 「考える力、豊かな感性を引き出すのが漢字の素晴らしさ」

石井式国語教育研究会

講師 A・E先生

「石井式能力開発教室」は、一歳六ヵ月から小学校三年生までを対象に、漢字を通して、お子さんの国語力の基礎を育てることを目的とした教室です。

一歳六ヵ月から、と聞くと、大抵の方は驚かれますが、まだ言葉の出ないお子さんでも、先生が見せる漢字カードを目にし、隣に座ったお母さんがそれをくり返し読むのを耳にしていると、頭の中には言葉としてきちんと定着していきます。そして、たとえば、体の部分を表す漢字をやっているときに「では“爪”はどれかな？」と尋ねると、たくさんあるカードの中から、きちんと“爪”のカードを指差すことができるようになります。

さらに、そうしたお子さんがいったん発語するようになると、今まで蓄積された言葉を一気にほとばしるように話しはじめる感動的な光景に出会うこともしばしばあります。

これは、言葉を音だけでなく視覚的なイメージとして定着させることができる、目で“見る言葉”としての漢字ならではの素晴らしさだと思います。

もともと幼児期の脳は、理屈で考えるのではなく目や耳から得た情報

をそのまま丸暗記する、いわゆる機械的記銘能力がもっともすぐれた時期にあります。ですから、大人が難しく感じる画数の多い漢字でも、幼児期の子どもは、むしろその複雑な字形を手がかりとして、苦もなく覚えてしまうのです。

また、この幼児期特有の機械的記銘能力を十分に刺激しておく、脳の次の発達段階である理屈で考える力、すなわち論理的記銘能力をも大きく伸ばすことができるのです。その意味で、漢字教育は、まさに幼児期ならではの、真の適時教育と言えるでしょう。

とはいえ、石井先生がよく「漢字を教える、のではなく、漢字で教える」とおっしゃるとおり、漢字はあくまでも手段であって、それ自体が目的ではありません。ですから、教室でも、漢字を“教え込む”のではなく、まず私たち先生自身が楽しむということを心がけながら、子どもたちに興味・関心のある題材をゲーム感覚で無理なくくり返すことで、言葉としてしっかりと定着させるようにしています。

具体的には、漢字の絵本が、幼稚園の年長さんまでの中心的な教材となります。まず、絵本の中の、くり返し出てくる漢字や子どもが関心をもちそうな漢字をあらかじめカードにしておき、先生がそのカードを黒板に貼りながら表現豊かにお話をする（これを「素読」といいます）からはじまります。またそれと並行して、その漢字カードを使って、フラッシュカード（一瞬だけカードを見せ、漢字を読んでいく方法。潜在意識にイメージが定着しやすく、集中力を高める働きもあります）や、パズル、ゲームを通して、くり返し読むことで言葉として定着させ

ていきます。

すると、子どもの頭の中には絵本のお話の内容がすっかり入ってしまい、しかも、絵本の文字を目で追う手がかりとなる言葉(漢字)もすでに定着しているので、先生が読むのに合わせて、指で文字をなぞっていく“なぞり遊び”さらには、先生と一緒に音読する、自分ひとりで読む、というようなことが自然な流れの中でできるようになるのです。

また、教室では、諺や俳句、『百人一首』、それに『竹取物語』のような古典や『論語』なども、幼児期のお子さんにも積極的に与えています。意味はわからなくても、これらのもつ美しい言葉の響きや独特のリズムを楽しく感じるができるだけで、言葉の感性を磨くのにとても役立ちますし、成長の過程で少しずつ自分なりの理解も深まっていくものなのです。

教室に通う年長の女の子のお母様から、こんなお話を伺ったことがあります。

ご家族そろってスキーへ行ったところ、あいにくの雨模様で、女の子は早くこの雨が止んでくれないかと祈るような思いで空を見上げていました。すると、その願いが通じたかのように、雨が次第に雪へと変わりはじめたのです。その光景を目にしたとき、彼女の口から不意にこぼれたのが「面白し雪にやならむ冬の雨」という、以前教室で習った芭蕉の句だったというのです。教室では、先生の側から「この句はこういう意味ですよ」と解説することは一切ないのですが、はっきりと意

味がわかっていなくても、句と同じような情景に出合ったとき、そのイメージがふっと言葉として出てくる……、これはとても素晴らしいことだと思います。

さらに、漢字というのは、ひじょうに論理的、体系的にできた文字ですので、子どもの考える力を引き出す素晴らしい力をもっています。すでに述べたように、機械的記銘能力をよく刺激すると、理屈でものを考える論理的記銘能力も早く伸びていきますから、漢字教育を受けている子どもの多くは、やがて「蟻や蝉は、同じ虫の仲間だから“虫”っていう字がついているんだね」というようなことを自分で発見したり、「胸や腹、腰っていう字は、何で体の部分なのに、“月”っていう字がついているの？」といった疑問を自然に抱くようになってきます。

そこで、年長さんの後半くらいから徐々に取り入れているのが、漢字の成り立ちを説明しながら子どもとともに考えていく解字指導です。

たとえば、筋のたくさん入った肉をかたどったのが“肉”の字である



こと、そしてこの肉体という意味の“肉”の字がさらに変化してできたのが“月”、いわゆる“ニクヅキ”であることを黒板に図解

漢字の成り立ちが分かれると覚えやすい

しながら楽しくお話ししてあげると、子どもたちは、ますます漢字に興味をもつようになります。と同時に、今度は、はじめての漢字に出会っても、自分なりに分析したり推理を働かせたりして、その読みや意味を考える力までついてくるのです。

このように、幼児期から楽しく漢字に触れて育った子どもたちは、ほとんど例外なく本を読むのが大好きです。また、語彙が豊かですから、学校へ行っても先生のおっしゃることがよく聞けて、きちんと理解できる子になります。

最近、学級崩壊や少年犯罪などがよく話題になりますが、幼い頃から、たくさんの美しい言葉に触れていると、子どもたちの中には複雑な人の心を理解し、思いやる心もきちんと育てられているのではないかと感じています。